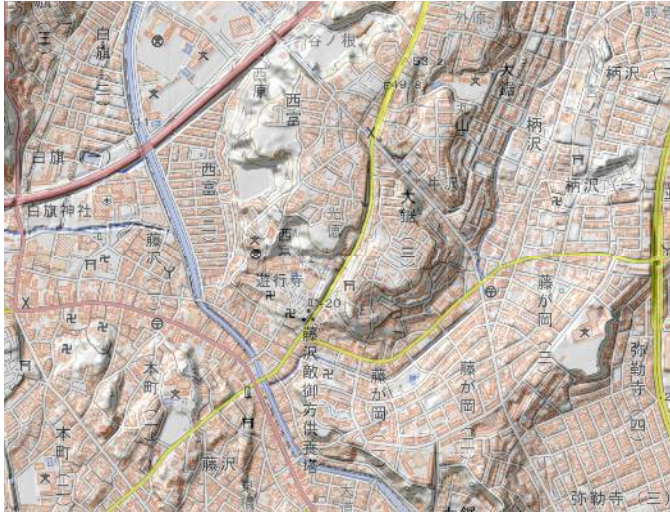


「藤沢の遊行寺(2)」

お茶の水女子大学サイエンス&エデュケーション研究所

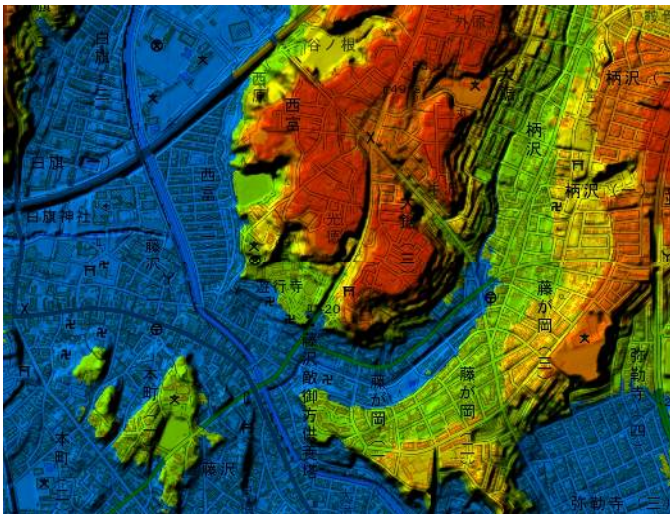
田中 千尋 Chihiro Tanaka

箱根駅伝で復路 8 区の選手を苦しめる「遊行寺坂」の正体は何なのか、少し調べてみました。

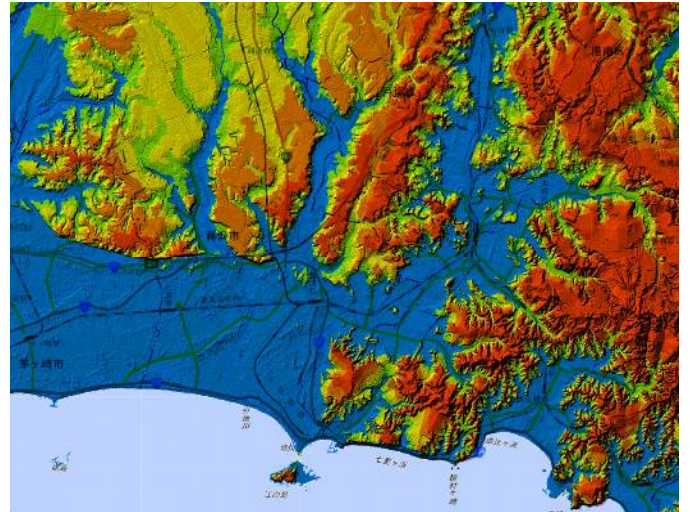


(国土地理院地形図／本図含め 3 図)

印影地形図で見ると、遊行寺や遊行寺坂付近は、かなり起伏に富んでいるとわかります。図の中央をほぼ南北に走る黄色い道路（旧東海道）が遊行寺坂です。周五郎の小説「遊行寺の浅」の中でも、盗賊が「切通しを駆け上って逃げた」という意味の記述がありますが、まさに現地の地形と合致しています。江戸時代からここは旧東海道の切通しだったのでしょう。

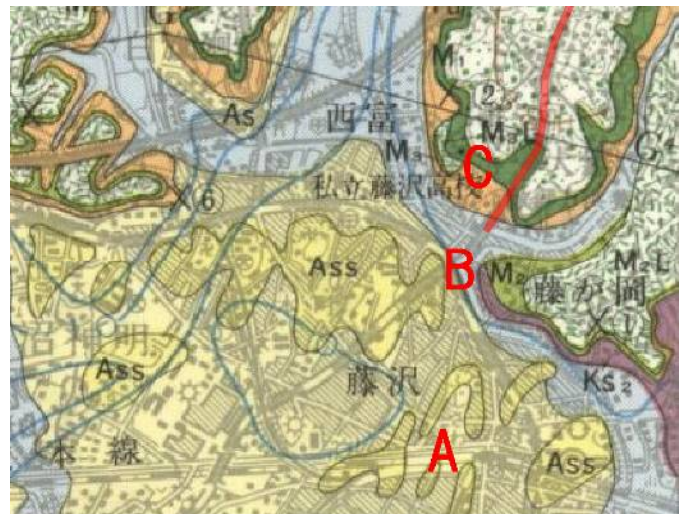


色別標高図で見ると、更にはっきりします。標高 20m までを青で表示するように設定しました。実は、今から約 6000 年前の「縄文海進（じょうもんかいしん）」の時期には、ちょうど青の表示部分は海だったことがわかっています。



更に広域の藤沢市～茅ヶ崎市あたりまでを表示すると、縄文時代には海が相当内陸まで入り込んでいたこともわかります。藤沢市街地や東海道線、江ノ電、小田急線などもすべて海面下です。遊行寺付近もリアス海岸だということもわかります。

縄文海進は縄文中期から徐々に終焉して海退が始まります。縄文晩期から弥生前期にかけては、現在の藤沢駅付近には、境川が形成した広大な三角州が存在したこともわかっています。



(産総研 1:50,000 地質図「藤沢」／部分)

A：藤沢駅 **B**；藤沢橋 **C**；遊行寺 **赤線**；遊行寺坂

遊行寺坂付近は、地質的にもかなり複雑です。地質 5 万図を見るとその様子がよくわかります。遊行寺坂は、水色表示の低地（完新世の低湿地堆積物／略号 Am）と、白斑点表示の台地（後期更新世の下部武蔵野ローム／略号 M₁L）の境界（段丘崖）をまともに縦断しています。その間には、薄橙色の砂礫層（相模層群・土屋層／略号 Tu）と、濃緑色の礫層（善行礫層／略号 M₁）が挟まっています。現在露頭の観察は難しいのですが、次回は探してみたいです。（つづく）